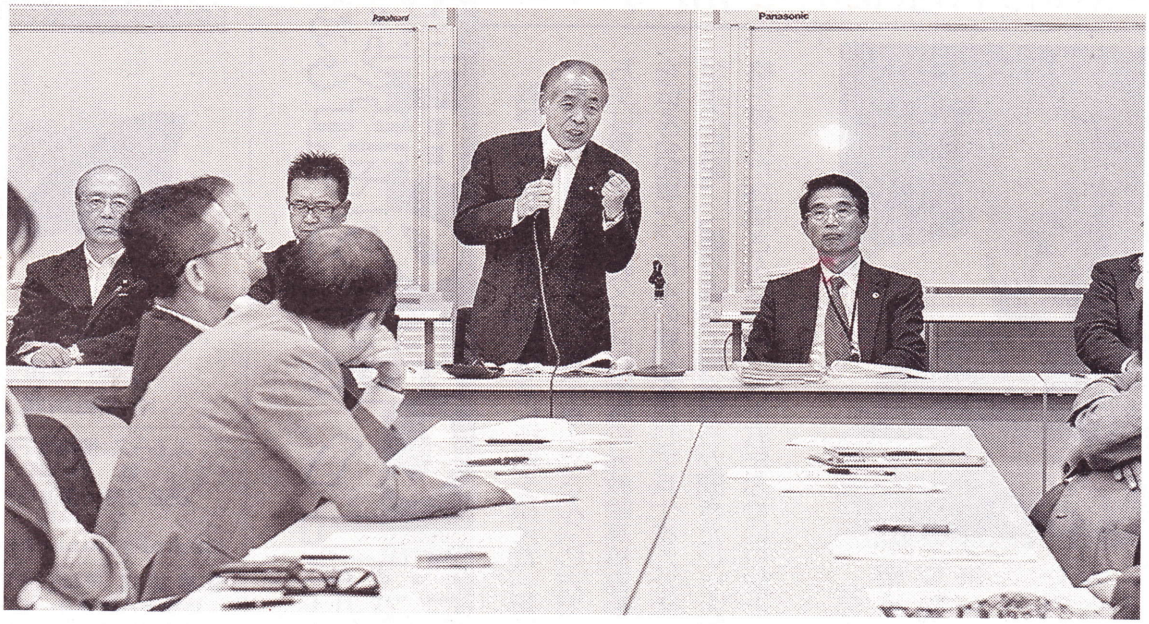
民主政権 魂はまだ



「民主党・取り調べの全面可視化を実現する議員連盟」の会議に出席し、熱弁をふるう鈴木宗男衆院議員㊥＝15日、国会で

特報 HOU TOKU

官僚政治▸▸戦前と同じにおい

政権交代後、鈴木議員は民主党と与党会派を組んで活動してきた。中でも力を注いできたのが、官房機密費の追及だ。

機密費追及

今年七月には、九八年の沖縄県知事選で、当時の小渕政権が普天間飛行場移設方針に沿う稲嶺恵一候補の応援に官房機密費から三億円を回したと発言した。これに対し、当時官房長官だった野中広務氏は「支出の事実はない」と反論した。

鈴木議員は「この発言後、野中さんと直接電話で話した。当時、小渕恵三首相は『沖縄はカネがかかるな。官邸の機密費で足りなければ、外務省から来ている金があるから』と言っていた。外務省からの金とは二十億円ともいわれた報償費。その言葉をあなたも聞いたはずだと野中さんに言うと、野中さんは『ああそうだな』と認めた」と再反論する。ちなみに、本紙の取材に対し、野中氏は再び「そんな話はしていない」と全面否定した。

その沖縄との因縁も深い。かつて米軍の砲撃演習場を自らの選挙区に移した一方、辺野古移設に奔走した。いまは一転、「辺野古の美しい海をコンクリートで埋めてはいけない」と訴える。

「前首相の鳩山（由紀夫）さんが（辺野古移転の）従来案に戻ったのも外務と防衛官僚に丸め込まれた結果」と語る。「菅さんは草かんむりが取れて、（官僚の）官さんになってしまった」

その官僚政治の打破のため、近年は衆院に提出された全議員分の半分を占める質問主意書を連発してきた。だが、かつては官僚と〝蜜月〟だった鈴木議員がなぜ、いま官僚批判に熱心なのか。

その理由を彼は軍国主義へ転げ落ちた戦前と同じにおいをいま、社会に感じるからだと説く。

「昭和五（一九三〇）年以降、独善的な正義感に取りつかれ、情勢認識を誤った軍事官僚とそれを後押しした民衆のポピュリズムにより、日本は軍国主義へと傾倒した。いまも一部官僚の動きと、小泉政権を生んだポピュリズムをみれば、そうした危険がよみがえっているといえる」

ただ、そうした認識を持ちながらも、鈴木議員は国政の表舞台からは公民権停止期間も含め、六年以上、姿を消さざるを得ない。若い政治家たちに何を求めるのか。

「今の若い政治家は偏差値は高いが、頭のよくない人が増えた。東大出は襟裳灯台より役立たない」と冗談交じりに評する。二〇〇六年に起きた民主党議員による「偽メール事件」を例に「そもそもメールなんて、いいかげんなもの。そんなものに引っかかる」という。

時代は変転する。〇二年の逮捕で権力中枢から追放された。いま、彼の肩書には「死刑廃止を推進する議員連盟」「（冤罪の可能性が指摘される）袴田巌死刑囚救援議員連盟」などが並ぶ。いわゆる「人権派」に転身したように言われる。

「自分は変わったつもりはないが、権力に取りつかれていると見られたこと自体が私の間違いだった。権力側にいた時は前しか見ていなかった。逮捕後は横や後ろを見て、声なき声を受け止められるようになった」

十五日も国会議員会館の彼の部屋には、支援者が次々訪れていた。間もなく刑務所に入る。覚悟を聞くと、こう答えた。

生涯、政治家

「（受刑中は）毎日が修行だと思って、新しいスズキムネオをつくりたい。八年前は極悪人扱いされたが、今は大勢の人が激励してくれる。議員資格があろうがなかろうが関係ない。私は生涯、政治家ですから」

収監間近 鈴木宗男議員語る

季節はようやく秋へ向かいつつあるが、この人は冬を迎えようとしている。衆議院議員、鈴木宗男被告。先月、議員在職25年の表彰を受けたが、今月７日、あっせん収賄事件などについて最高裁が上告棄却。間もなく収監される。刑期満了後も公民権は５年間停止だ。民主党代表選では小沢一郎前幹事長を応援したが、敗北した。逆境の中、いま彼の目には人生の舞台である政治がどう映っているのか―15日にインタビューした。（出田阿生、秦淳哉）

すずき・むねお　自民党の故中川一郎元農相秘書を経て、1983年に衆院初当選。北海道・沖縄開発庁長官などを歴任した。2002年、あっせん収賄事件などで逮捕、起訴され、一審判決は懲役２年、追徴金1100万円。05年に新党大地を結成し、衆院議員に返り咲いた。08年、控訴棄却。政権交代後、衆院外務委員長に就任したが、今月、最高裁で上告棄却。失職する見込み。北海道出身。62歳。

「可視化議連に出るのも、きょうが最後でしょう」。十五日午前、衆院第二議員会館の会議室。鈴木議員は民主党の「取り調べの全面可視化を実現する議員連盟」の会合に出席していた。

「司法の危機。なぜ（民主党代表選があった）この時期（に自らの事件について最高裁の上告棄却）だったのか」。この席でも、検察批判の〝ムネオ節〟が、さく裂した。

上告棄却後、弁護団は異議申し立てをしたが、過去に認められた例はなく収監は秒読み。だが、まだ現職議員である。

小沢応援団

民主党代表選では、小沢陣営の「応援団」を務めた。その結果については「予想通り」と話す。

「菅（直人首相）さん圧勝に見えるが、中身は違う。党員・サポーター票は、菅さんが十三万八千、小沢さんが九万票。六対四の差しかない」

代表選 ▸▸ 菅首相圧勝説を否定

「菅さんの勝因は現職の強みとメディアで連日、世論調査の数字を流されたアナウンス効果。ポピュリズムの勝利だ。九年前に（自民党総裁選で）小泉（純一郎）さんが勝った形に近い」

さらに「小沢さんは民主党を救った。（代表選で）自民党の新役員なんて吹っ飛んだ」と付け加えた。そう語りつつ、〝小沢勝利〟後の衆参両院のねじれ解消に動いていたことも示唆した。

「小沢さんによる政界再編は全くない。目指すのは党の改革でしょう。だけども、もし小沢さんが勝っていたなら、その際は参院や衆院の自民党から、民主党に来てもいいと私に言っていた人たちはいた」

応援団とはいえ、小沢氏とは因縁浅からぬ仲だ。一九八三年、中川一郎元農相の急死を受け、当時秘書だった鈴木議員は旧北海道５区からの立候補を決断。だが、一郎氏の長男昭一氏が後継として自民党の公認を得たため、無所属での出馬を余儀なくされた。「鈴木の公認は認めない」。一貫してそう主張したのが当時、自民党総務局長だった小沢氏だった。

「政治家鈴木宗男の育ての親は金丸信（元副総理）。同じく金丸さんを師と仰ぐ小沢さんだが、私を公認しろという師の要求はねつけた。しかし、客観的には賢明な判断。その時、彼をなかなかの人物だと思った」。本音か否かは分からない。だが、「政治家鈴木宗男」はそう言い切る。

古巣の自民党については「今は将たる器の人がいない。発信力、オーラを感じる人がいない」と関心が薄そうだった。与党育ち。権力の魅力も怖さも知り尽くしている。

その権力を民主党が奪ってから丸一年。秘書時代から四十一年を永田町で生きた彼の目に民主党政権はどう映るのか。

「政権交代はしたが、魂が入っていない」